



おすすめ書籍

Recommended Books

写真と動画でよくわかる！ コンパニオン・バードの 臨床テクニック

著：水上昌也（水上犬猫鳥の病院）

B5判 168頁 オールカラー
定価 16,000円（税別）
緑書房 2020年7月刊



●推薦者

酪農大WAMCゼミ生有志・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学群）

現在、酪農学園大学野生動物医学センターWAMCが、附属動物医療センター（旧動物病院）の一診療科として検討されている。この検討が成就するのかどうかはともかく、2004年以来、WAMCでは年間約10件の傷病野鳥を受け入れて、所属ゼミ生が熱心に対応する¹⁾。

しかし、その対応は、当然、見様見真似であるし、そもそも、本学はじめ鳥類臨床の教育は十分ではない。そうなると、信頼すべき縁が信頼すべき教科書となる。

今回、動画を併用した待望の書が刊行されたので、早速、コアユーザーとなるゼミ生有志3名に読み込んでもらった（岡田東彦、林 美穂および松倉未侑；五十音順）。所詮、学生なのでというお考えもあろうが、是非、最低限の鳥類臨床の技術を具備しなければならない彼女らの率直な反応をご覧頂きたい。

（文責 浅川）

本書は計6つの章及び付録で構成され、巻末には動画のリンクがまとめられている。Chapter 1から3及び6では基本的な手技について触れられており、Chapter 4と5は各論的な内容となっている。

冒頭で鳥類の各部位や骨格の名称、臓器の位置関係についてカラーの口絵が挿入されている。非常に見やすく、読み始めるに当たって理解がしやすかった。本書で記載されている解剖学的事項について、その都度口絵と見比べることで、知識の定着が早まるのではないだろうか。

Chapter 1では捕獲と保定について述べられている。保定は鳥類臨床において必要不可欠な手技であるが、我が国では方法が明確に統一されていない。従って、海外の書籍に基づく種々の保定法が、本章で列挙記載されている。鳥種に応じた適切な方法が、複数枚の写真と共に解説されており、初心者にとって理解しやすい工夫が凝らされていた。様々な角度から撮られた写真が載せられていることが、本書の特長の一つと感じた。

※ NJK は、みなさんで作る雑誌です。症例紹介、ご質問、ご意見をお寄せください。

Chapter 2では基本的な検査に必要な臨床テクニックについて述べられている。採血はあらゆる動物種で実施される基本的な手技である。鳥類で一般的に使用される血管の名称や輸血法が、哺乳類その他動物のそれと大きく異なっていた点が印象に残った。血管の駆血や圧迫止血を基本的に行わないという点も意外であった。嚔嚢内カテーテル法は、強制給餌可能な投与量が文献により異なり判然としないため、その場の術者の判断が重要になると認識した。総排泄腔検体の採取についても解説がされているが、取り扱われることが少ないため、貴重な情報が得られた。本章もまた、画像がふんだんに使用され、一連の流れの理解が捗った。さらに後の章についても同様であるが、各テクニックの難易度のレベル及び必要な保定法が表記されており、実施する際の参考となるであろう。

Chapter 3は薬剤投与における臨床テクニックについてまとめられている。経口、皮下、筋肉内、静脈内、骨髄内投与のコツを、実際に行う手順通りに写真が並べられ、加えて解剖学的な骨や筋のイラストや動画も載っているのでとても理解しやすくなっている。コラムには輸液療法について詳しく例も載せられている。

Chapter 4には呼吸器と繁殖関連疾患についての治療テクニックがまとめられている。鳥類で発生が多い疾患で実施する鼻腔洗浄や卵排泄処置などの治療法について、他の章と同様に手順通りの写真とともに詳しく手技の説明がされている。動画もつけられており、実施する上での注意点も把握できるようになっている。本書は治療法にフォーカスしているため、他の書籍(読者は、著者も執筆している学窓社出版のエキゾチック臨床を参考にした)と合わせて読むと病態とつながり、診療において非常に役立つと感じた。

Chapter 5では、包帯法、鼻涙管洗浄、嚔嚢切開術、胃洗浄、腹側切開術、体側切開術、卵巣全層切除術、尾脂腺摘出術、骨髄穿刺、内視鏡検査について記載されており、いずれの項目にもはじめに手技の

難易度とその際の保定法、続いて適応される症例や注意点などの概要、そして豊富な写真と動画のリンクとともに手技についての説明がされている。海外の文献や著者自身の経験も踏まえて書かれており、まだまだアプローチ法が確立していない部分も多い鳥類臨床において非常に有用な書籍だと感じる。内視鏡検査において、鳥類は気嚢があるため気腹の必要がなく、むしろ二酸化炭素での気腹をすると窒息してしまうということには驚いた。また、開腹の際に切開した気嚢は縫合せずに腹膜を縫合するとの記載があったが、自然に気嚢が修復されるのか疑問であった。

Chapter 6では、爪切り、ウイング・クリッピング、ピーク・クリッピングについての記載がされていて、Chapter 5と同様にそれぞれの項目には手技の難易度とその際の保定法、概要、そして手技の説明がされている。爪切りとウイング・クリッピングはあくまでも生活の質の向上を目的としているということが印象に残った。風切羽の役割や位置関係が写真とともに簡潔に解説され、非常にわかりやすい。ピーク・クリッピングの項目で、疥癬によりくちばしの変形と過長が起こることを知り驚いた。

Appendixesでは血液塗抹標本の作製とマイクロチップの挿入について記載されている。鳥類の特徴的な血球の形態や、鳥種ごとの白血球数・白血球分画、マイクロチップの規格も書かれており、鳥類ではマイクロチップは左胸筋内に挿入することになると初めて知ることができた。

本書は検査や処置の手技を重点的に記載され、鳥類臨床に必要な不可欠な基本的手技が盛り込まれていて、我々学生を含め、初心者にとって特に役立つはずだ。全体を通して写真が豊富で動画のリンクも掲載されているが、動画のリンクは本書の後半にまとめて記載されているため、動画を見るためにページを行き来する必要があるやや不便に感じた。

(文責 酪農大WAMCゼミ生有志)

【引用文献】

- 1) 浅川満彦：傷病野生鳥獣救護活動と寄生虫病，鳥類臨床研究会会報，(17): 19-27, 2014.